

日本語入力時の [変換] 操作と [Enter] キーの操作

長澤直子*1・寺田亜佐*2

Email: nagasawa@g.osaka-seikei.ac.jp

*1: 大阪成蹊短期大学経営会計学科／立命館大学大学院社会学研究科

*2: 大阪成蹊短期大学非常勤講師

◎Key Words キーボード入力, 変換操作, Enter キー

1. はじめに

キーボードによる日本語入力教育に関する研究では、主にタイピング技能の向上へ向けた取り組みが報告されている⁽¹⁾⁽²⁾。ただ、日本語入力には変換操作があるため、タイピング技能を伸ばすだけでは効率の良い入力操作を習得することはできない。これまで、その阻害要因として、学生のローマ字入力時の綴り選択や、連文節変換の使用、ファンクションキーによる変換操作の使用などを見てきたが、どれも芳しい状況にないことが明らかになっている⁽³⁾⁽⁴⁾。日本語入力を効率よくこなすためには、文字入力の際の打鍵数だけでなく、変換操作における打鍵数にも注目する必要がある。

本研究においては、[Enter] キーの操作に着目した。[Enter] キーは、日本語入力時においては「確定」と「改行」の2つの役割を担うものとなっている。このうち「確定」については、変換操作の直後に次の文字を入力することでスキップすることが可能になるが、学生が文字入力している様子を見ると、細かく区切って変換した後に毎回必ず [Enter] キーを押して確定するケースが少なくない。そのために打鍵数が増える結果となり、入力操作が遅々として進まない。

日本語入力時における、確定目的としての [Enter] キー操作は、一体どのように使われているのだろうか。本研究においては、その疑問を、学生への調査を通して明らかにしたい。

2. 仮説

この疑問について考えるにあたって立てた仮説は、次の内容である。

仮説1. 日本語入力をする際に、ファンクションキーによる変換や連文節変換など比較的高い変換スキルを身に付けている人は、変換操作をするごとに [Enter] キーを押して確定せずに入力するのではないかと。

仮説2. 高校までの教育において、文字入力の練習をみっちりやる機会があった人は、変換操作をするごとに [Enter] キーを押して確定せずに入力するのではないかと。

これらに留まらず、効率の良い入力方法を身に付けている人に特徴的なことを明らかにしてモデルケースとするべく、短期大学の学生を被験者とした質問紙調査を行った。

3. 質問紙調査

調査は、2016年4月に短期大学の学生（文系・1年生）82名に対して実施し、うち、有効回答数は73件であった。内容は、次の項目を含むいくつかの質問をした。

質問1. 漢字変換をした後、毎回 [Enter] キーを押していますか

質問2. 高校生の時に、文字入力をみっちり練習する機会がありましたか

質問3. [→] [←] キーを用いた文節移動の方法を知っていますか

質問4. [Shift] + [→] [←] キーを用いた文節の区切り修正方法を知っていますか

質問5. ファンクションキーによる変換方法を知っていますか（[F6] [F7] [F8] [F9] [F10] の働きについて教えてください）

このうち、質問3および4については連文節変換の使われ具合を見るためのもので、昨年度にも質問紙調査において同様の質問をしている。その際、[Enter] キーの操作との間に関連性は見られなかった。今回は、それに加えて高校時代における文字入力の練習経験と、ファンクションキーによる変換に対する認知度を調査することで、より詳しく検討することを試みた。

4. 結果

4.1 単純集計結果

まず、質問1～4の各問に対する回答の単純集計は、次のようになっている。漢字変換後に [Enter] キーを押すという回答が約85%（図1）、高校の授業である程度時間をかけて文字入力を練習したという回答が半数近く（図2）、文節移動について知る者が半分弱、区切りの変更については80%以上が「知らない」（図3）となっている。

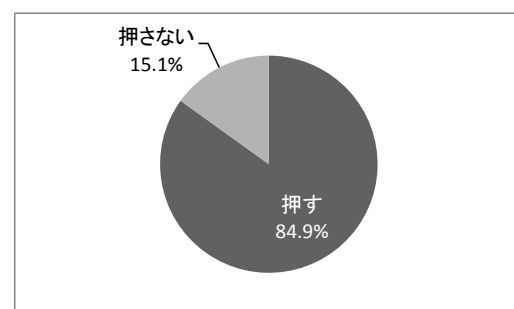


図1 漢字変換後にEnterで確定するか否か

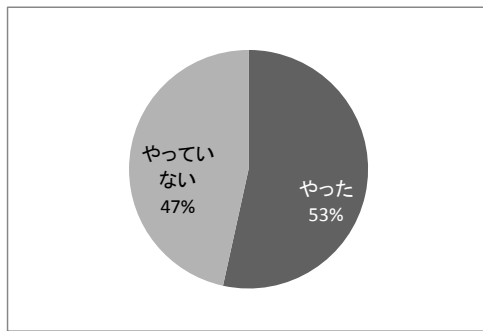


図2 高校で文字入力をみっちりやったか

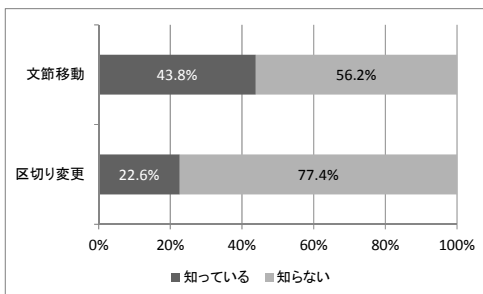


図3 連文節変換に必要な機能を知っているか

次に、質問5に対する回答の単純集計は、次のようになっている(表1)。これについては、最もよく知られている[F7](カタカナ)で16名(約20%)、全問正解者はわずか2名(2.7%)であった。

表1 ファンクションキーによる変換の認知度

質問(正解)	正解者数	割合
[F6](ひらがな)	4	5.5%
[F7](カタカナ)	16	21.9%
[F8](半角カタ)	8	11.0%
[F9](全角英数)	5	6.8%
[F10](半角英数)	3	4.1%

4.2 独立性の検定

質問1の回答に対して、他の項目がどのような関連性を持つかについて、それぞれ χ^2 検定を用いて独立性の検定を実施したが、有意差は認められなかった。変換後の[Enter]キー操作と他の操作との間には関連性が認められず、仮説は支持されなかった(表2~表4)。ファンクションキーによる変換については、最も正解者数が多かった[F7]キーの結果で検定している。

表2 高校時代の文字入力練習経験との関連性

		変換後に毎回Enterを		計
		押さない	押す	
高校時代に文字	やった	7	32	39
入力をみっちり	やってない	4	30	34
	計	11	62	73

$\chi^2_{(1)}=0.54, p>.05$

表3 文節移動に関する知識との関連性

		変換後に毎回Enterを		計
		押さない	押す	
[→]で文節移動	知っている	4	28	32
ができることを	知らない	7	34	41
	計	11	62	73

$\chi^2_{(1)}=0.29, p>.05$

表4 ファンクション変換に関する知識との関連性

		変換後に毎回Enterを		計
		押さない	押す	
[F7]キーでカタ	知っている	3	13	16
カナに変換でき	知らない	8	49	57
ることを				
	計	11	62	73

$$\chi^2_{(1)}=0.22, p>.05$$

5. 考察

効率の良い入力方法を身に付けている人に特徴的なことを明らかにしてモデルケースにするべく、さまざまな角度から検討したが、[Enter]キーで確定操作をしない人が持ち合わせるスキルや特徴は一切見当たらなかった。変換後に毎回[Enter]キーを押すか否かが、持っている文字入力スキルに左右されないということは、「押す・押さない」がそれまでの経験によって決まるのではないだろうか。つまり、最初に操作を教わった際の経験によって形作られるということである。

最初に操作を教える人が保護者なのか、あるいは小学校の教員なのかは分からないが、その人たちの使い方がそのまま伝授されている可能性がある。文節変換であったり、漢字とかなを分けて入力していたりする癖も、そのまま伝搬されている可能性がある。小学校の教員養成課程における文字入力指導の方法を点検する必要があるのではないだろうか。

6. おわりに

2013年10月より文部科学省によって小中学生を対象に実施された情報活用能力調査において、「簡単な択一式の問題は解答率が高く、操作や入力を伴うものは解答率が低くなる傾向にあった」ということが報告された。教育機関においてタブレット端末に物理キーボードを接続して利用するケースも多く、キーボード入力の「質」について真剣に考えるべきタイミングが到来している。

昨年度に実施した、個別のオペレーションを記録して分析する調査においては、数少ない連文節変換の利用者が変換後の[Enter]キー操作を行っておらず、少ない打鍵数で効率良く入力する傾向が見られた。そのため、被験者数を多くしてその傾向がより明らかになるか否かを調査したが、質問紙ではその傾向を掴むことが難しく、質問紙調査の限界を感じることもあった。

今後は、再度個別のオペレーションを記録する方法での調査を実施することを検討したい。

参考文献

- (1) 吉長裕司, 金川明弘, 川畑洋昭: “打鍵技術の習熟過程における学習者の初期熟達感と打鍵能力の関係”, 情報処理学会論文誌, 44(12), 3252-3255 (2003).
- (2) 辻岡卓, 細川康輝: “ブレンド型授業によるタッチタイピング教育の評価”, 四国大学紀要, 37, 13-18 (2012).
- (3) 長澤直子: “連文節変換はなぜあまり使われないのか—日本語入力におけるオペレーションの経年比較—”, 情報化社会・メディア研究, 11, 69-76 (2015).
- (4) 長澤直子: “日本語入力時における「変換」操作の問題点”, 情報処理学会第78回全国大会講演論文集, 2016(4), 511-512 (2016).